

バラバラだったチーム全体が 今、一つの方向に向き始めた

新生・柏レイソルは石崎新監督の下、スタートを切った。昨シーズン、チーム最年長の薩川了洋と共に戦った若手選手は「サツさん、今年は無開気いすつよ」と言う。しかし薩川は、「厳しい戦いになる」

とハッキリと言いつつ。それはフリーユゲルエ時代の仲間だった山口素弘から助言を聞いたからだ。山口は名古屋グランパスから新潟アルディージャに移籍し、最終戦でJ1昇格という経験をしてきた。

「ヤマ(山口)が言うんですよ。J2は同じチームと4回戦う。勝てなくなる。1順目に勝つて、2順目から相手が、レイソルに勝てない、と思ったらスピードのある選手をひとり前線に置いて全員で守ってくる。J1では考えられない。でもそれがJ1とJ2ではサッカーが違うと言われる所以なんですよ。J1昇格は簡単ではないですよ。ただ、うちにはJ2の厳しさを経験している選手もいます。なにより石崎監督がJ2の監督を経験しているのが大きい。カギは夏場、そこをどう乗り切るかでしょう。それと毎試合、点を取ること。僕の経験から、0

ソルは1-2で落としてしまう。続くホームでの第2戦、本来の3バックから4バックに変え2-6で大敗し、あつげなくJ2に降格した。しかも、その内容が最悪だった。まるで、これからキャンプを始めるチームのような、チーム作りが遅れて開幕を迎えたチームのような。この1年間、何をやってきたのか。これがシーズン最後の試合とはとても思えない内容だった。下部組織から有望な若手が伸び、常に経験のある外国人選手を獲得し、強化の仕方さえ間違えなければ、必ずや上位に進出できるメンバーを揃えている。それが、あんなに簡単にJ2に降格してしまうのか。昨シーズン、最後の現役として、苦しいシーズンを過ごした薩川了洋に振り返ってもらった。

「僕は11月の段階で『戦力外通告』を受けています。第2戦はスタンドから見えていました。実は試合は最後まで見ていないんです。自分が出していないと少しささと悔しさを、最後まで見たくないという気持ちもありました。4-1になった段階で席を立ちました。何ていえないのか……。みんながうな垂れて降格する姿逆に甲府の優勝したかのような雰囲気を見たくなかった。試合が終わった時点で選手はチームに残るのか、残らないのか。J2でプレーす



柏レイソル

悪夢と、ゼロからの巻き返し

～薩川了洋が語る、失意の2005年とレイソル再生計画～

文・渡辺達也 写真・六川則夫
Text by Tatsuya Watanabe Text by Norio Rokukawa

「選手と監督、選手とフロント、たぶん監督とコーチも。すべてが、ひとつの方向に向いていなかったんです」薩川は振り返る。2年連続で入れ替え戦に臨まざるを得なかった柏レイソル。降格という現実を突きつけられた選手・フロント・スタッフが、J2の舞台に挑む――

点で負けるのと点取って負けるのでは違う。1試合に1点、それが最低条件です」
そして続けた。

「J1に上がるには、レギュラー11人の力だけじゃ無理だと思っています。11人がずば抜けていても、J1には昇格できないと思っています。登録選手が30人いるなら、30人にどれだけの力があるかなんです。年間48試合の長丁場、W杯があっても代表の試合があっても休みなしで試合が続きます。J1しか経験のない選手は、途中でできなくなる。怪我人も出てくる。最後はチーム力の勝負になる。レギュラー選手の抜けた穴を、埋められる選手がどれだけいるかです」

今シーズンからフロント入りし、事業部・スポーツ営業課で再出発した薩川了洋は、新生・柏レイソルを、そう分析した。

しかし、レイソルになぜJ2に降格してしまったのだろうか。

2年連続で入れ替え戦に出場。対戦相手はヴァンフォーレ甲府。レイソルはJ1で下から3番目の成績。ヴァンフォーレはJ2で3位。しかもレイソルは前年の入れ替え戦を経験している。普通に考えれば、レイソルが負けるはずはなかったヴァンフォーレ・ホームの第1戦、レイ



ソルは、J1でプレーするのだから、そこに直面するわけですよ。だから選手は、凄く複雑な心境だったと思う」

J1が18チーム、J2が13チーム。計31チーム。それがJリーグではあるが、J1とJ2では、すべての面で大きな差がある。J2はプロ野球でいえば2軍と言っても過言ではない。だからこそ、J2降格というのは選手にとって、その後のサッカー人生を大きく変えることになる。

「甲府戦。あの試合は、去年のレイソルを象

徴していると思います。バラバラだったんです。1年間で、ああいうチームにしかできなかったんです。甲府を見てみると、本当にチームがひとつになってましたよね。甲府は魚でいえば鯛だと思えます。ひとつにまとまってドーンとくる。そこに勝てなかったんですよ。レイソルは選手個々を見ればもう少し大きな魚だったかもしれない。まとまれば、鯛の集団を一気に飲み込むこともできたんです。でもそれがバラバラだから、まとまって一気にこられると、あれだけの差となつてでてしまうんです。いろんな面において、どこを見ても、うまくいっていないなかつたという反省点があります。選手と監督、選手とフロント、たぶん監督とコーチも。すべてが、ひとつの方向に向いていなかったんです」

チームをここまで追い詰めた原因は、いったいなんだったのだろうか。

「僕は選手の立場でしか見られないけど、選手と監督の間でいい関係を作れなかったことは一因でしょうね」
監督に言われたことをやって結果が出なければ、監督を信じられなくなる。監督を信じられなくなれば、そこに信頼関係などあるわけがない。選手と監督の関係がよくなければ、チームがひとつにまとまるわけがない。



「だから、選手だけで何度もミーティングをしました。僕は試合にあんまり出ていないけど一番年上だから、みんなを誘って。普通に飲みにいつても結局、サッカーの話になって、チームの話になる。何度も何度もミーティングはやりました」

7月、短期間で6試合を消化する「ホット6」その前の新潟十日町合宿。「このままではまずい」と緊急ミーティングを行った。

「方向性を失っている選手が多かったんで『俺たち年上の選手は、もう文句を言わずにやる。だからみんなも我慢してやってくれ。とにかくサッカーをやろう』と言ったんです。そのくらい関係が悪かったです」

自分たち、選手で何としなければ危ない。このままではJ2に降格してしまう。選手たちは危機感を持っていた。そして「ホット6」、レイソルは2勝3分け1敗と勝ち越した。

しかし、その勢いも長くは続かなかつた。9月13日、ラモスがコーチに就任する。次の相手は首位を走るガンバ大阪だった。

「相手がガンバでしょ。みんなの意識は『強いよなあ』だった。そこでラモスさんが言ったのは『お前らは強いんだから、普通にやれば勝てるんだから、自信を持って』って、それを1週間、

うちに勝つてから調子を戻している」

大宮は柏に勝つてから4連勝。清水も2勝1分け。共にJ1残留を決めている。11月26日、東京V戦。柏は5-1で大勝。東京VのJ2降格が決まったと同時に柏の入れ替え戦出場も決定した。

降格の最大の原因はチーム全体、それぞれがバラバラの方向を向いていたからである。しかし、それをフロントは指を加えて眺めていただけなのだろうか。

「だから、選手も監督、コーチのスタッフもフロントもバラバラだったんです。チームは生き物ですから、それでは勝てないですよ」

サッカー人生最後に最悪のシーズンを過ごした薩川だが、ひとつだけ嬉しいことがあったという。

「甲府戦、あれだけポコポコにされても、うちのサポーターは最後の最後まで応援してくれてたんですよ。それが嬉しかった。だから6点、10点取られても最後まで、戦う姿勢をサポーターに見せなければいけない。僕らが泣けば一緒に泣いてくれる人もいる。そのサポーターの前で、途中で諦めた選手が何人かいた。みつともないことをした。そう試合後に土屋が言ったんです。その通りだと思う。僕ら選手たちが

言い続けたからね。選手は自信をなくしていたから利いたよね。しかも、あのガンバに逆転勝ちですからね。でも、それも長く続かなかつた。あのサッカーを続けていければ勝てたんですよけど」

残留を賭けた3連戦があった。それが10月29日、第29節の大宮戦から新潟、清水と続く3連戦だった。7連敗中の大宮、7試合で1勝の新潟、点が取れずにもがいている清水。まさに最後のサバイバル戦だった。

大宮をホームに迎えたレイソルは、「ホームだから攻撃的に行く」という早野監督が言ったように攻撃的布陣で臨んだ。それまでの3バックから慣れない4

バックに変え、それまでほとんど試合に出場していないFWフランサをスタメンで使い3トップにした。しかし、4バックは機能せず、外国人選手は結果を出せず、調子の悪い大宮に中盤を支配させ1-2で敗れた。

「あの大宮にポコポコにされましたからね。それからは勝ち点3を狙うしかなかった。清水戦に賭けるしかない」と

続く新潟戦。後がないレイソルは善戦した。先手を取られながらも追いつく展開で2-2で引き分けた。しかし試合の流れはレイソルに

子供だったんですよ」

しかし、薩川は今、去年のことよりも今年のチームのことを考えている。

「今年のレイソルは立ち上がりから、前からプレッシャーをかけていく。少しだけスタミナが心配なんです。特に夏場は苦しくなる。選手って汗をかくと動けなくなるんです。ですから、

傾いていた。

「新潟戦はレイソルの流れでした。勝ちに行きたい試合だった。大宮に負けて、それからは勝ち点3を取りにいかなければ残留できない。監督、スタッフには考えがあつての采配だとはわかつてる。それでも、もつと攻撃的な選手を入れて畳み掛けるような選手交代を、と。結果が出なくて、そういったことまで納得がいかなくなりました。監督にもそれは直接話しました」

11月20日、ホームに清水を迎えた大一番。柏が勝ち点31、清水は勝ち点32。柏が勝てば残留に近づく大きな一戦だった。開始0分、レイソルのゴールで先制する。

「よし、いっげ。という感じでした」

しかし、その後の流れは清水に傾く。21分にキャプテンの明神が怪我で途中交代。後半31分にPKをとられマルキーニョスに決められ同点。33分にはクレイベルが退場となり、10人で戦わなければならなくなった。そしてロスタイム、チェ・テウクのゴールで柏は大事な試合を落とし、自力での残留が消えた。

「チームの雰囲気は最悪でした。でも落ち込んだり沈んだりしている暇はなかった。すぐに次の試合があつたから。でも大宮も清水も

前半の押し込んでいるうちに1点、2点取っておきたい。そして後半は逆にカウンターを狙う。そういう試合展開にできれば……。前半、点を取れないと苦しい試合になってしまつた」

そして、現役を引退した自分の役割について、薩川は言った。

「フロントに言いたいことがあつたら、僕に言えたい。僕が選手の考えを上を持っていきます。だから選手の食事会にも積極的に参加していきます。その代わり、フロントの苦勞を選択して話します。試合に勝つて紙ぶぶきにまみれ、選手は気分いいけど、そのあとにビニール袋を持って掃除する人もいる。お前らの給料を捻出するために、40代、50代の人があんな頭下げるんだ。試合に負けただけでも、何時間も頭を下げたりしているんだぞ、と。それを頭のどこかで覚えていてくれればいい。J2は、そんなに甘くはない。厳しい戦いになると思うんです。それでも、僕もレイソルのJ1昇格に、少しでも力になればと思っています。今年の目標はひとつ。J1昇格ですから」



Football LIFE